

京都大学	博士（医学）	氏 名	林 晶子
論文題目	Relevant factors to psychological status of donors before living-related liver transplantation (生体肝移植術施行前におけるドナーの心理学的状態に関連する因子)		
(論文内容の要旨)			
近年、特に日本においては、生体肝移植手術が末期の肝機能障害に対する確立された治療法となっている。そして医療技術の進歩により生体肝移植術がドナーに与える身体的侵襲は軽減されつつある。心理学的な影響については術後にQOL（quality of life：生活の質）が上がったり、自尊心が向上したりするといった研究がある一方で、術前・術後の不安や抑うつ、葛藤や怒りを指摘する研究もあり一定ではない。またドナーをとりまくどのような因子がそのような心理学的影響を与えるかについてはこれまで詳細な研究がなされていない。これまで生体腎移植ドナーの心理学的研究では、臓器提供をする意思決定の過程と術後のドナーの心理状態との関連が示唆されており、またレシピエントとの関係も影響があるとされている。そこで本研究はドナーの心理状態と、それに影響を与える因子を抽出することを目的として以下のように行われた。まず成人間の生体肝移植術施行を1週間以内に控えて入院中の91組の生体肝移植ドナーとレシピエント（いずれも18歳以上）を対象とし、ドナーについては生体肝移植手術施行前に臓器提供の意思決定に至った動機、過程、葛藤の有無、臓器提供にあたってドナーが感じる周囲からの圧力の有無について半構造化面接を行った。面接に続けてSTAI（State-Trait Anxiety scale）を用いて状態不安と特性不安の程度について検討し、不安が臓器提供という特殊な状況で引き起こされているか、元来不安になる傾向が強いかどうかを峻別した。またBDI（Beck Depression Inventory）を用いて抑うつの程度を検討した。更にWHO-QOL26を用い、QOLについても検討を行った。レシピエントについても同様に心理テスト（STAI, BDI, WHO-QOL26）を行った。その後、ドナーは動機（自ら志願したか、しなかったか）・過程（すぐに決断したか、決断を先延ばしにしたか、よく考慮したか）・葛藤・圧力の有無にてグループ分けされ、それぞれのグループ間で心理テストの結果すなわち心理状態に差異があるか統計的に検討された。またドナーとレシピエントの心理状態の相関も検討された。その結果、66組のドナー・レシピエントから心理テストの結果が得られた。動機として生体肝移植手術が勧められた当初から自ら志願したのではないドナーや、過程として臓器提供の意思決定を先延ばしにしたドナーは優位に高い状態不安と抑うつを認めた。さらに臓器提供に葛藤があったドナー、圧力を感じたドナーは高い状態不安と抑うつ、低いQOLを認めた。また自ら志願して臓器提供をしたドナーとそのレシピエントは、状態不安とQOLが高い正の相関を示すことが明らかになった。これらの結果からドナーの心理学的状態を考慮する際には、臓器提供の意思決定の動機や過程、レシピエントの心理学的状態を考慮する必要があると考えられ、特に状態不安に注意を払う必要が示唆された。今後は術前の心理学的状態が術後の心理学的状態にどのような影響を与えるか、またそのような場合にどのような心理学的介入が必要かについてさらに研究を進めることによって、生体肝移植術を受けるドナーの術後の不安や抑うつの軽減、QOLの向上が期待されると考えられた。			

(論文審査の結果の要旨) 本研究は生体肝移植術ドナーの心理状態と、それに影響を与える因子を抽出することを目的とし、成人間の生体肝移植術施行前の生体肝移植ドナーとレシピエントを対象とした。ドナーには生体肝移植手術施行前に臓器提供の意思決定に至った動機、過程、葛藤の有無、周囲からの圧力の有無について半構造化面接を行った。同時にドナー・レシピエントともに心理テストを用いて不安、抑うつの程度、QOLを検討した。ドナーを動機・意思決定過程・葛藤・圧力の有無にて分けたグループ間での心理テストの結果を比較し、ドナーとレシピエントの心理テストの比較も行った。66組のドナー・レシピエントから結果が得られ、生体肝移植手術が勧められた当初から自ら志願したのではないドナー、臓器提供の意思決定を先延ばしにしたドナーは優位に高い状態不安と抑うつを認めた。臓器提供に葛藤があったドナー、圧力を感じたドナーは高い状態不安と抑うつ、低いQOLを認めた。また自ら志願して臓器提供をしたドナーとそのレシピエントは状態不安とQOLが高い正の相関を示すことが明らかになった。これらの結果からドナーの心理学的状態には、臓器提供の意思決定の動機や過程、レシピエントの心理学的状態が関与していることが示唆された。以上の研究は生体肝移植術ドナーの心理状態とそれに関与する因子の解明に貢献し、生体肝移植術がドナーに与える心理学的影響の軽減に寄与するところが多い。 したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。 なお、本学位授与申請者は、平成21年2月9日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。			
要旨公開可能日： 年 月 日 以降			